

18世紀初頭の人形浄瑠璃における 新たな演技の共同体

ジャナ ブラウン
Jyana BROWNE

1703年には近松門左衛門によって書かれた人形浄瑠璃の『曾根崎心中』が大坂の竹本座での大当たりを取った。『曾根崎心中』は世話物というジャンルの代表になった。鳥越文蔵は、世話物という用語の歴史を述べた際に、『曾根崎心中』以前にも世話浄瑠璃に似ていた芝居があったけれども、『曾根崎心中』こそが世話浄瑠璃を流行らせたと指摘した^①。一般的には、世話物は人間模様を如実に描写する物語だと言われている。近松の二十四作の世話物のうち、心中物は十一作ある。庶民の主人公が遊女の恋人に関係した金銭の問題によって一緒に死を迎えるという心中物の特徴的な芝居の構成は、ジャンルの発展があってもあまり変わらないとドナルド・キーンが指摘した^②。ジャンルの構成の基本が受け継がれていく上で、森修が指摘したのは、心中物の模様は繰り返し上演されており、『曾根崎心中』以後の心中物は、連作と見ても良いということである^③。近松の最初の心中物、『曾根崎心中』から最後の『心中宵庚申』までの期間は、20年間に至らなかった。

大坂の竹本座の観客は殆ど町人で、舞台に反映された日常生活は、観客自身の生活に似ていたことが知られている。そのため、芝居と観客の距離が近かった。町人の家や店、道頓堀という演劇の地域、有名な橋や神社などの町人がよく足を踏み入れる大坂の場所が近松の筆で描写された。主人公等も、大体庶民や遊女であった。加えて、心中物は恋愛の話が中心となるはずであるのに、問題の種はいつも金銭の問題なので、庶民が共感しやすい話であった。キーン氏

は、庶民の観客と芝居との距離を更に縮めるために、当時の事件のまま主人公の名前は変えずに登場させ、大坂で有名な演劇の演者や店や茶屋を描写し、人気が高い俗曲が引用されたと指摘した。^④本研究では、観客と登場人物との距離を縮める心中物の特徴として、特に感情表現に注目したい。そのため、心中物はどのように時代物の感情表現と異なるかを説明する。その後、演者と観客のパフォーマンス中の関係を調べるために、『心中重井筒』と『心中二枚絵草紙』を例として、玄人と素人のそれぞれのパフォーマンスが描かれた場面を分析する。最後に、イギリスの地理学者ナイジェル・スリフトの理論を応用する。スリフト氏は、都市というのはどんな瞬間でも感動が鳴り響く空間で、その響きの流れが殊にアイデンティティに影響を与えると述べている。スリフト氏のこの刺激的な理論を利用し、18世紀初頭の大坂では、玄人と素人のパフォーマンスによりどのような響きがあったか考えてみたい。

心中物の感情表現は、それ以前の浄瑠璃の感情表現とは異なる。心中物では、時代物とは違い、庶民の悲哀の表現と愁嘆場面が強く描写された。世話物における新しい感情表現を、田中純は次のように説明した。「今までの涙を誘った以前の人々の話も、神佛の靈験も呪術も、遠い昔話となり現代の情に絆れてその時代のなかに涙を流した。」^⑤つまり、それまでの身分が高い人のための涙ではなく、町人自身のための涙を流すことになったということだ。涙を誘う表現を具体的に見るため、『心中天の網島』の最後の部分の詞章を参考に見ていこう。恋人同士が息絶えた後で、太夫は「朝出の漁夫が、網の目に、見つけて、死んだ、ヤレ死んだ出会へ出会へと声声に、言ひ広めたる物語すぐに成仏得脱の、誓ひの網島心中と、目ごとに涙をかけにける」と作品を語りおさめる^⑥。死体を見つけた漁夫の反応を述べてから、恋人同士の成仏を伝える。それから、漁夫と佛の網、芝居の題名、芝居に対する観客の反応を「網」という掛詞で繋ぎながら描写する。『心中天の網島』の観客は皆、この芝居を見ながら泣く。『心中天の網島』は全ての心中物と同じように観客の涙を誘いながら終わる。そして、死亡してから二人は浄土に行く。近松の心中物の最後の詞章では、心

中した人物が成仏することがほのめかされる。その点は、近松以外の同時期の心中物と異なる^⑦。心中者が成仏するという信仰が含まれた最後の詞章を聞きながら観客が泣く。この感情表現により、信仰が更に深くなると考えられる。

感情表現、特に悲哀の表現がどのように観客に働きかけたかを見よう。近松が書いた1709年の『心中重井筒』のパフォーマンス場面を例として挙げたい。道行では、恋人同士が大坂道頓堀を通り抜け、死への旅路へと向かう。二人の心中が、死んだ後でどのように舞台上で演じられるかを心に描きながら、歌舞伎や人形浄瑠璃の芝居小屋の前を走り抜ける。この時の道行の語りは、人物の愁嘆する場面の感情表現も巧みに描写する。この道行においては、演者と観客の感情の交流も読み取ることができる。

恋人同士が走りながら、道頓堀の芝居小屋や茶屋がある川沿いの浜側に入る。「我が身は今宵散り果つるなごりつきせぬ浜側のここは竹田か。夜は何時ぞ五つ、六つ、四つ、千日寺の鐘も八つか。」^⑧と恋人同士の惜別を述べる。未来に移り、「七つの芝居 二人が噂せば狂言の仕組の種となるならば、我を紺屋のかた岡に何とか思ひそめ川は、台詞に泣いてくれよかし」。と、自分たちが死んで芝居の登場人物になることを考える。自分を演じる片岡歌舞伎芝居小屋の染川の演技に観客が泣いてほしいという希望を述べる。そして、人形遣いの飛騨掾が人形を動かすと観客は涙で袖が濡れると述べている。歌舞伎の女方のよしざわあやめの詞章は観客を泣かせる。嵐という芝居小屋を通り、空が晴れても、恋人同士は「恋慕の闇」に暗くなる。そして、『心中重井筒』が実際に演じられた竹本座に移る。『曾根崎心中』を参照してから「味気なや」つまり「むなしさ」が語られる。それぞれの芝居小屋に移るにつれて、感情が重なる。同じ演技ではなくても演じる側と見る側の感情の相互交流の印象が作られた。

その場面には空間のズレも時間のズレも書かれた。空間的にはそれぞれの芝居小屋や芝居の中から、恋人達がいる外へと速く移る。その結果、テンポを作る。道頓堀の芝居小屋を相次いで通り抜く恋人同士が、一生懸命に走っていることが感じられる。更に、道行の細部でも実際の観客の感情表現を生々しく描

いた。例えば、千日寺の鐘の詞章では本当に千日寺の鐘が鳴るようにテンポが作られた。恋人同士の涙と露の滴りとを同じように喩え、涙の雫が聞こえるように書いた。その音によって実際の観客が感情を感じられる。

空間のズレのもう一つの効果は、芝居小屋の中と外の境が曖昧になるにつれて、演者と観客の相互交流が深くなるということである。この道行では、ただ演者と観客が悲哀を感じるだけではなく、泣きながら一つの演技の共同体が生み出される。演技を通じ、演じる側が見る側に直接働きかけ、見る側も演技に入り込み、人形、演者、そして観客の感情が演劇空間で具現化される。

空間的なズレだけではなく、時間のズレも叙述された。この道行において、恋人同士と演者や観客との間には時間のズレがある。恋人同士の立場から見ると、自分たちの現在と、自分たちの死後の未来の芝居が述べられている。演者と観客の立場から見ると、近い過去に恋人たちが体験した出来事と、それを劇化したパフォーマンスと、過去と現在が重ね合わされるように語られている。感情が含まれた動作やテンポ、詞章、声によって、感情が恋人の過去からパフォーマンスの現在に飛んでいくというように印象づける。

『心中重井筒』の道行で、様々な心中物の特徴が見られる。キーン氏が指摘したように当時の大坂の芝居や演者が描かれる。森氏が分析したように『曾根崎心中』の引喩があり、これらは連作と見られる。更に、空間的な移動によって観客と演者と登場人物が、感情の相互交流に入り込む。その上、作られたテンポと時間のズレによって、観客と死んだ恋人同士の距離を縮め、観客が恋人同士の感情を感じるようになる。

18世紀の初頭には、折しも素人の人形浄瑠璃が流行し、興行も行われる状況にあった。素人の浄瑠璃が盛り上がってきたのは、近松の没後だったが、この時代はその基盤を成す時期である。近松が描写した素人のパフォーマンスを詳しく見るため、1706年に書かれた『心中二枚絵草紙』に移ろう。

『心中二枚絵草紙』の上之巻では、竹本座の顔見世を見たばかりの主人公お鳥と客貞が屋形船に乗る。船で幫間は、当時人気が高かった近松の『用明天王

職人鑑』という時代物の道行を語ってほしいとお島に頼む。そして、お島が語り始める。お島が語っている間、岸で男性一人が船を見ながら歩く。船が彼より速くなれば、彼はさらに速く歩く。逆に、船が彼より遅くなれば、彼はゆっくり歩く。貞はその動作を見ると腹が立ち、声をかける。その男はやはりお島の恋人だが、恋人の関係を隠すためにお島の語りを聞いていただけだという嘘をつき、お島の演技を批判する。ふさわしい語り方を見せるように彼は同じ浄瑠璃を語る。

その場面でも特に目立つ一つの点は、どんな人物でも浄瑠璃の語り方を知っているという点だ。お島と幫間という悪所の人物も、町人の市郎右衛門も、田舎からの貞も趣味として語ったようだ。

もう一つの特徴は、感情表現が強調されているということだ。『用明天王職人鑑』は時代物なので、先述したような心中物の特徴とは異なるが、語られた道行は恋愛の感情が深く含まれた場面のため、市郎右衛門がお島の演技を批判する際に、感情の表し方が中心となる。「この山路の道行は、恋を含んだ節付なるに只今お島様とやらあそばした、浄瑠璃の節は少しも変らねども、情けを御存じない故かまことの心少なくて、御真実のない故かいかにしても道行が浮気に聞こえて底意に恋がござらぬ」と、市郎右衛門がお島を批判する^⑨。これは、お島が言葉やテンポを間違ったわけではないが、恋の感情を真実に表さなかったことに対する批判だった。このように素人の演技でも『心中重井筒』の玄人と同じように感情表現が中心となる。

しかし、『心中重井筒』の玄人の演技と『心中二枚絵草紙』の素人の演技を比較すると異なる点が二つある。一つは、誰が観客かという点である。『心中重井筒』の玄人の上演の場面では、観客は芝居小屋に座っている人々である。一方、『心中二枚絵草紙』の素人の上演の場面では、意識的に観客になった観客、ここでは貞、がいるけれども、なにも意識せずに観客になった観客、つまりここでは岸で歩いている市郎右衛門がいる。このことが示唆しているのは、素人によるパフォーマンスの空間が広がるにつれて、観客となる人々も増える

ということだ。すなわち、無意識のうちに、心中物の感情的な相互交流に参加する人々もいたはずなのである。

『心中重井筒』の女人の演技と『心中二枚絵草紙』の素人の演技における異なる点のもう一つは、詞章のことである。『心中重井筒』で叙述されている女人は作者によって定められた詞章を語る。だが、素人の場合は、パフォーマンスのやり方はさらに自由である。先述したように、お島は演技がいかどうかを別として正しい詞章を語った。しかし、市郎右衛門が語る時、貞を馬鹿にするために詞章を少し改める。そのため、素人のパフォーマンスの遊びによって演じる側と見る側の相互交流が深くなる可能性もあるだろう。

スリフト氏の理論では都市というのは没個性的な空間と思われるけれども、実は人々の感情はどの瞬間でも鳴り響く空間であると指摘される。古代ギリシアのプラトンを始めとして、それまでも様々な哲学者が都市に対して感情の役割を討論した。だが、都市の歴史を研究する学者は感情を無視するのが普通である。¹⁰ 本研究が示唆するのは、近松の心中物を考慮すると、感情の響きの過程が見えるだろうということだ。まずは、キーン氏や森氏が述べたように近松が様々な方法で観客と浄瑠璃の人物との距離を縮めた。そして、観客は近松の心中物を通じ、庶民の日常問題の愁嘆や心中してから成仏するという信仰などのような悲劇に含まれたものを感じるようになる。その上で、近松の心中物は感情表現を実現することを強調し、観客と演者の感情の相互交流を作った。素人のパフォーマンスの興隆することで相互交流の空間が広がり、相互交流に参加する人々が増える。誰もが演じる側にまわる可能性を持ち、それを享受する側にまわる可能性をより高める。そのような過程によって庶民のアイデンティティが生まれ、庶民がある種の共同体をなすという、一つの進歩の様相が形づくられると考えることができるのではないだろうか。

[注]

- ①鳥越文蔵「心中天の網島」、『近松の時代』、岩波書店、一九九八年、188。
- ②Donald Keene, "Introduction," *Major Plays of Chikamatsu*, Columbia University Press, 1991, 16.
- ③森修『近松門左衛門』、三一書房、一九五九年 188。
- ④Donald Keene, "Introduction," *Major Plays of Chikamatsu*, Columbia University Press, 1991, 20.
- ⑤田中純「元禄期の人形芝居」、『西鶴と浮世草子研究 2』、笠間書院、二〇一一年、211。
- ⑥近松門左衛門「心中天の網島」『新編日本古典文学全集 近松門左衛門集 2』小学館、二〇〇三年、431。
- ⑦井口洋「世話浄瑠璃の成立と展開」、『近松の時代』、岩波書店、一九九八年、119。
- ⑧近松門左衛門「心中重井筒」『新編日本古典文学全集 近松門左衛門集 2』小学館、二〇〇三年、188-190。
- ⑨近松門左衛門「心中二枚絵草紙」『新編日本古典文学全集 近松門左衛門集 2』小学館、二〇〇三年、53。
- ⑩Nigel Thrift, "Intensities of Feeling: Towards a Spatial Politics of Affect," *Geografiska Annaler. Series B. Human Geography*, Vol. 86, No 1, 2003, 57.

* 討議要旨

湯沼氏より、発表の中で引用されたイギリスの地理学者ナイジェル・スリフト、日本近世文学の研究者森修の論に関する出典の確認および具体的な説明を求める質問があった。また、同氏は「共同体」概念に関しても、社会学者大塚久雄が古代ギリシャのポリスから説き起こし、都市共同体や農業共同体の概念を論じたことがまず想起されるが、本発表で論じている「共同体」は町人による庶民の共同体を指すのかと尋ねた。発表者はまずスリフトの都市ロンドンを中心とした一連の研究について、一般の人々の感情がその都市に影響を与えるというもので、都市研究を行う他の研究者が建物・道路などの構造物、経済的・政治的現象の研究を進めていくのと対照的で刺激的であると回答した。また、森修の研究については近松門左衛門の評伝を参照したと述べた。そして「共同体」概念については、アメリカで日本の江戸時代を研究する学者が、政治的な役割を担っていないという理由で演劇や文学に関心を持たない場合があるが、「共同体」(Community)は、政治的な役割があるか否かを別にして、それが作られることで自分たちのために何かを行うことが可能になる集団と考えていると回答した。